

第15章 アイヌ民族

第1節 社会的環境

第1項 民族的活動の変遷

北海道ウタリ協会千歳支部等の活動概要

北海道アイヌ協会は昭和21（1946）年2月24日に日高管内の静内で開催された大会で誕生した。同年3月13日には社団法人としての認可を受け、土地に対する権利の回復などを求めて活動を展開していく。翌22年5月には札幌で大会を開催したが千歳では大きな動きはなかった。32年に蘭越町内会が北海道アイヌ協会に加入し、支部結成の原点になった。活動の中心になったのは後に初代支部長に就く水本清治である。当初の協会加入戸数は44戸だった。34年に千歳が主なロケ地となりアイヌへの差別問題に取り組んだ石森延男原作の映画「コタンの口笛」が公開されたが、一般的にはアイヌ文化や差別問題への関心は低かった。

35年に北海道アイヌ協会再建総会が開催され、36年には組織名が北海道ウタリ協会に改称された。改称の理由は会員勧誘、入会時の心理的抵抗の軽減を図るためとされ、当時の深刻な差別の状況がうかがえる。

37年2月に北海道ウタリ協会千歳支部が結成されたが、組織的には蘭越町内会と重なっていた。この年、初代の蘭越生活館が完成し、翌38年9月には蘭越へき地保育所が開所する。47年に支部は町内会と完全に分離した組織になった。

52年4月17日、蘭越小学校で約1000人が出席して支部活動20周年、支部結成15周年を祝う式典が開催された。この年までに加入戸数は105戸まで増加し、北海道の中でも組織力と結束力の強い支部に成長していた。

昭和50年代後半からアイヌ文化への関心が高まるとともに、アイヌ自身の手で伝承し保存しようとする活動が活性化していく。千歳は女性たちの活動が先行した。ユカラなどの口承文芸、ウポポ（座り唄）、ホリッパ（輪踊り）、イカラカラ（刺しゅう）やイテセ（ゴザ編み）などを復活していた。男性もカムイノミの基本的な所作や作法の習得、必要なイナウやイクパスイなどの祭具作りに努めた。

59年に「アイヌ古式舞踊」が国の重要無形民俗文化財の指定を受け、63年に白沢ナベフチ（フチ 女性の古老に対して使う敬意が込められた呼称 日本語の「おばあさん」に近い）のアイヌ文化の口承文芸の伝承活動に対し、北海道文化財保護功労者賞が授与された。

平成元（1989）年、札幌で第1回アイヌ民族文化祭が開催され、千歳からは工芸作品などが出品された。

2年3月に2代目の蘭越生活館が開館した。様々な会議や交流のほか文化伝承活動の場として設置された。同年4月、千歳アイヌ文化伝承保存会が結成された。アイヌ文化の伝承と保存を志す者であれば誰でも入会できる組織にした。2年の8月に市民団体が公演する野外劇「いのち宿る水」を後援した。アイヌ文化の自然観を基本に自然の大切さをテーマにした劇である。支部は演者にアイヌ文化を解説すると共に、フチたちが古式舞踊を指導するなど、全面的な協力を行った。

3年8月に千歳アイヌ語教室が開講。9月に新しいサケを迎える儀式「アシリチェップノミ」が初めて一般公開で行われた。この儀式は現在も千歳アイヌ協会の重要な年間行事の一つになっている。本来、この儀式は各家庭でサケの初漁の際に行うものであるが、アイヌ文化の普及のために千歳全体（シコツコタン）の儀式として実施し、同時に伝統的漁具のマレク（鉤鉚）によるサケ漁も復活し公開した。場所は蘭越の千歳川右岸にある南長

沼用水路千歳川頭首工の付近である。

5年5月20日、市から「アイヌの伝統的芸能と工芸技術」が無形文化財の指定を受け、指定文化財の保持団体に千歳アイヌ文化伝承保存会が指定された。

1993(平成5)年は国際連合(以後国連)が「世界の先住民の国際年」(国際先住民年)に定めた年であり、千歳支部でも国際先住民年を記念する事業が行われた。

7年3月に支部主催のアイヌ文化祭「シコッタ・ウエ・ピリカレ(ちとせで・おたがい・高めあいましょう)」が開催された。

8年3月には千歳市立末広小学校の空き教室に学校、千歳支部、千歳アイヌ文化伝承保存会、地域が協力してつくっていたチセが完成し、学校教育現場における本格的なアイヌ文化学習の実践が始まった。

9年7月1日に「アイヌ文化の振興並びにアイヌの伝統等に関する知識と普及及び啓発に関する法律」(アイヌ文化振興法)が施行し、同時に「北海道旧土人保護法」が廃止された。この新しい法律は表題のとおり文化の振興に特化した法律であり、業務を実施するために財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構が設立された。

同年に札幌地方裁判所はいわゆる「二風谷ダム裁判」^②でアイヌ民族を先住民に該当すると判断し先住民の認定は司法が先行することになった。

11年11月28日、北海道ウタリ協会が主催する第12回アイヌ民族文化祭が千歳市民文化センターで開催された。札幌、旭川、白老など全道各地の参加者のほか、特別ゲストとして台湾の先住民パイワン族が招待され唄や踊りを披露した。千歳支部会員は大会運営とともに踊りやアイヌ語劇に出演するなど大会を大いに盛り上げた。以後、支部を中心に地道な活動を継続し、千歳独自の文化を掘り起こすなど大きな成果を上げてきた。また、

優れたアイヌ文化の伝承者にも恵まれ、アイヌ文化を紹介する絵本などの出版活動も活発に行われた。

21年1月にアイヌ文化振興・研究推進機構の助成事業としてアシリパノミ(新年を迎える儀式)を行った。以後、年明けの大切な行事として毎年1月に実施されている。

22年に支笏湖温泉で開催された政府主催の日中韓環境サミットで古式舞踊を披露するなど文化の普及や振興活動は広がりを見せ、様々な事業が定着し成熟してきたといえる。北海道ウタリ協会は21年4月1日から北海道アイヌ協会に改称し26年に社団法人から公益社団法人に移行した。それに伴い支部も同年4月から千歳アイヌ協会に改称した。アイヌ文化の伝承と保存はもちろんだが、国連の宣言にうたわれた先住民としての権利をどのように具現化して行くのか、今後も息の長い活動がつづく。

なお、歴代の支部長および会長は次のとおりである。初代は水本清治(37年)、2代目小田愛吉、3代目小山田英三郎、4代目小山田直美、5代目小田忠男、6代目小山田直美、7代目水本陽一、8代目石辺勝行、現在は9代目中村吉雄が平成16年から就任している。

註(1) アイヌ語は文字を持たないため片仮名で表記する。表記方法は主に中川裕著『アイヌ語千歳方言辞典』を参考にした。小文字の片仮名はアイヌ語の発音や音の強弱などを文字として表現するために用いられている。

(2) 北海道沙流郡平取町の沙流川に建設された二風谷ダムをめぐる裁判。札幌地方裁判所は建設用地の強制収用において用地がもつアイヌ民族の文化的な価値を評価しなかった違法性を指摘。判決文の中で「国は、先住少数民族であるアイヌ民族独自の文化に(後略)」と述べアイヌ民族を先住民と認定した。

少数民族・先住民族問題

少数民族 1966(昭和41)年に国連第21回総会で国際人権規約が採択され、1976年から効力が発生し日本は1979年に批准した。規約第27条では「種族的、宗教的又は言語的少数民族が存在する国において、当該少数民族に属する者は、その集団の他の構成員とともに自己の文化を享有し、自己の宗教を信仰しかつ実践し又は自己の言語を使用する権利を否定されない」と規定している。また、第41条では締約国に対し規約に認められた権利の実現のために実行した措置などの報告を義務づけている。

政府はこの規約に基づいて国連の自由権規約人権委員会に報告を行っているが、第1回の報告(1981年・委員会審査)では第27条の権利は法の下に何人にも担保されているが規約に該当する少数民族は日本に存在しないとした。委員からはアイヌ民族の存在等について意見や質問があったが、政府は現在のアイヌの生活様式が他の国民と差異がないなどと説明をした。第2回の報告(1988・審査)においては、アイヌ民族が第27条に示す権利を有している事実を認めたが、少数民族であるとは認めなかった。しかし、第3回の報告(1993・審査)では、アイヌ民族が第27条に基づく少数民族と称されても差し支えないとし、消極的ながらアイヌ民族が少数民族であることを国連の場で初めて認めた。

国際先住民年 1990(平成2)年12月の第45回国連総会において1993年を国際先住民年に定めた。テーマは「先住民年・新しいパートナーシップ」。先住していた者と後に居住した者とが抱える対立などの諸問題の解決を目指し、国際協力の促進を図る目的で国連人権委員会が発案した。1992年に開催した国連の国際先住民年開幕式典に北海道ウタリ協会理事長野村義一が招待され、アイヌ民族を代表して記念演説を行った。このことは、国連がアイヌ民族を日本の先住民族であると認識しているこ

とを明示し、アイヌ民族の国際的な認知度を高める結果になった。

千歳支部では国際先住民年を記念する事業として平成5(1993)年8月から小田喜代作と小田杵三の両エカシ(エカシ 男性の古老に対して使う敬意が込められた呼称 日本語の「おじいさん」に近い)の指導のもとに16年ぶりに丸木舟を製作し、9月5日にチブサンケ(舟おろし)の儀式を行った。

また、千歳市民文化センターで9月3・4日の両日に実施した「千歳国際先住民のつどい」には一般市民が多数参加し、舞台での踊りに観客も加わり大きな交流の輪ができた。また、12月6日には「アイヌ文化展示会」を実施した。

アイヌ民族を先住民族とすることを求める国会決議 国政の場では内閣官房長官からの要請で平成7年3月より招集されていた「ウタリ対策の在り方に関する有識者懇談会」が8年3月に報告書をまとめた。報告ではアイヌの先住性については多くを述べていないが「少なくとも中世末期以降の歴史の中でみると、学問的に見てもアイヌの人々は当時の「和人」との関係において日本列島北部周辺、とりわけ我が国固有の領土である北海道に先住していたことは否定できないと考えられる」とした。

9年に札幌地方裁判所で「二風谷ダム裁判」の判決があり、その中でア



写真15-1 千歳国際先住民のつどい(H5)
踊りはハラルキ

アイヌ民族を先住民族に該当するとしたのは前述のとおりである。政府が国連への報告でアイヌ民族を少数民族と認めるも先住民族とは公式に認めていない状況下の司法判断であった。

2007年9月13日、第61回国連総会は「先住民族の権利に関する国際連合宣言」を採択した。46の条文から成り、先住民族が保持する自決権とその政治的地位を自由に決定すること、強制的に同化されない権利や文化を破壊されない権利などを示すとともに、国が適正に措置すべき事項が示された。日本政府はこの宣言の採決に賛成票を投じた。143カ国が賛成し、反対4カ国、棄権11カ国、34カ国が欠席した。

国連の動きに呼応し日本でも平成20年6月6日に国会の衆参両院が「アイヌ民族を先住民族とすることを求める決議」を全会一致で採択した。両院のホームページによると決議は次のとおりである。

昨年九月、国連において「先住民族の権利に関する国際連合宣言」が、我が国も賛成する中で採択された。これはアイヌ民族の長年の悲願を映したものであり、同時に、その趣旨を体して具体的な行動をとることが、国連人権条約監視機関から我が国に求められている。

我が国が近代化する過程において、多数のアイヌの人々が、法的には等しく国民でありながらも差別され、貧窮を余儀なくされたという歴史的事実を、私たちは厳粛に受け止めなければならない。

すべての先住民族が、名誉と尊厳を保持し、その文化と誇りを次世代に継承していくことは、国際社会の潮流であり、また、こうした国際的な価値観を共有することは、我が国が二十一世紀の国際社会をリードしていくためにも不可欠である。

特に、本年七月に、環境サミットともいわれるG8サミットが、自然との共生を根幹とするアイヌ民族先住の地、北海道で開催されることは誠に意義

深い。

政府は、これを機に次の施策を早急に講ずるべきである。

一 政府は、「先住民族の権利に関する国際連合宣言」を踏まえ、アイヌの人々を日本列島北部周辺、とりわけ北海道に先住し、独自の言語、宗教や文化の独自性を有する先住民族として認めること。

二 政府は、「先住民族の権利に関する国際連合宣言」が採択されたことを機に、同宣言における関連条項を参照しつつ、高いレベルで有識者の意見を聴きながら、これまでのアイヌ政策を更に推進し、総合的な施策に取り組むこと。

右決議する。

同日、決議を受けて北海道出身の町村信孝内閣官房長官（福田内閣）は、次のとおり談話を発表した（首相官邸HP）。

1. 本日、国会において「アイヌ民族を先住民とすることを求める決議」が全会一致で決定されました。

2. アイヌの人々に関しては、これまでも平成8年の「ウタリ対策のあり方に関する有識者懇談会」報告書等を踏まえ文化振興等に関する施策を推進してきたところですが、本日の国会決議でも述べられているように、我が国が近代化する過程において、法的には等しく国民でありながらも差別され、貧窮を余儀なくされたアイヌの人々が多数に上ったという歴史的事実について、政府として改めて、これを厳正に受け止めたと思います。

3. また政府としても、アイヌの人々が日本列島北部周辺、とりわけ北海道に先住し、独自の言語、宗教や文化の独自性を有する先住民族であるとの認識の下に、「先住民族の権利に関する国際連合宣言」における関連条項を参照しつつ、これまでのアイヌ政策をさらに推進し、総合的な施策の確立に取り組む所存であります。

4. このため、官邸に、有識者の意見を伺う「有識者懇談会」を設置することを検討いたします。その中で、アイヌの人々のお話を具体的に伺いつつ、わが国の実情を踏まえながら、検討を進めて参りたいと思います。

5. アイヌの人々が民族としての名誉と尊厳を保持し、これを次世代へ継承していくことは、多様な価値観が共生し、活力ある社会を形成する「共生社会」を実現することに資するとの確信のもと、これからはアイヌ政策の推進に取り組む所存であります。

以上のように、政府はアイヌへの差別の存在とアイヌが日本の先住民族であることを認め、今後もアイヌ政策の推進に取り組む姿勢を示した。

アイヌ文化振興法

正式には「アイヌ文化の振興並びにアイヌの伝統等に関する知識の普及及び啓発に関する法律」という。平成9（1997）年5月14日に成立し、同年7月1日に施行した。

北海道ウタリ協会は昭和59（1984）年5月の総会で「アイヌ民族に関する法律（案）」を決議し、7月に北海道知事と北海道議会に実現に向けて陳情した。北海道は10月に北海道知事の私的諮問機関「ウタリ問題懇話会」を設置した。

61年に中曽根康弘首相の単一民族発言があり、北海道ウタリ協会が抗議するなど、図らずもアイヌ民族の存在が全国的に注目を集めることになった。63年3月に懇談会はアイヌに関する新たな立法措置が必要と報告。同年8月に北海道、北海道議会、北海道ウタリ協会の3者がアイヌに関する新たな法律の制定を国に要望した。その主な内容は「アイヌの基本的人権の順守、教育と文化の振興、産業経済の安定、民族自立化基金の創設、アイヌの代表を含む民族政策の審議機関の設置」であった。

平成元年12月に国は内閣内政審議室を中心に関係10省庁からなるアイヌ

新法問題検討委員会を設置。7年3月に内閣官房長官の私的諮問機関「ウタリ対策のあり方に関する有識者懇談会」を設置した。懇談会は8年4月に報告書を取りまとめたが、その中の新しい施策の概要（提言）で「（前略）所要の施策を可能な限り新たな立法措置をもって実施を図ることが望まれる」としている。

9年にアイヌ文化振興法が施行すると同時に北海道旧土人保護法が廃止された。この新法は13条からなり、文字どおりアイヌ文化の振興を図ることに主眼を置いたもので、その他の要望を反映しているものとは言えない。しかし、第1条の「目的」で「アイヌの人々の誇りの源泉であるアイヌの伝統文化の振興と普及、啓発を推進することにより、アイヌの人々の民族としての誇りが尊重される社会の実現を図ること」とし、アイヌ民族の存在を初めて法的に肯定した。併せて第3条以降で国や地方公共団体の責務としてアイヌ文化の振興などを図るための施策を推進することや、具体的な方策について定めている。アイヌ文化の振興はアイヌ民族のアイデンティティを復活する大事な手立てであることは明白である。

また、国は文化振興以外の様々な権利について、前述の内閣官房長官談話のとおり国連の「先住民族の権利に関する国際連合宣言」を参照し、総合的な施策に取り組む方針を示している。

蘭越生活館

昭和36（1961）年、国は北海道や北海道ウタリ協会からの強い要請を受け、厚生省予算の地方改善施設整備費補助金の中にウタリ福祉対策費を計上した。これにより北海道は国の補助を受けて生活館や共同浴場の設置など、福祉向上へ本格的な施設整備の取り組みを開始した。

千歳では37年12月1日に蘭越生活館が市の施設として蘭越44番地に設置された。『市史』によるとその事業内容は ①生活相談と指導 ②季節保

育所の開設 ③図書室の開設 ④保健衛生に関する集会とある。プロック造平屋建てで床面積199平方メートルの施設であった。このほかに隣接して蘭越共同作業所が40年12月10日に、蘭越第二共同作業所が49年10月30日に設置され木彫りの熊を生産していた。

国が生活館設置を48年から制度化し、生活館の目的を「アイヌの人々の生活上・啓発活動の推進。北海道のアイヌ集落とその周辺住民の生活改善、福祉の向上を図るため」とした。設置主体は北海道内の市町村とし、平成25(2013)年度現在で27市町146館が運営されている。

千歳では設置から27年を経過した生活館の建て替え工事が平成元年10月に始まり翌2年2月に竣工。3月18日に落成記念式が新生活館の大会議場で開かれた。総工費は約5850万円。木造平屋建てで床面積は前生活館の約2倍の400平方メートルに広がり、アイヌ文化の伝承活動のための実技研修室、調理自習室などが設けられた。現在はアシリパノミをはじめ、アイヌ語教室、刺しゅう教室、ウポポやホリッパの練習など様々な祭事や文化の伝承保存活動の場になっている。

なお、共同作業所2棟は建物や設備の老朽化と木彫り製品の需要低減により新生活館の設置と同時に廃止された。

参考文献

大竹秀樹「日本政府のアイヌ民族政策について」『日本福祉大学研究紀要―現代と文化』第121号2010年／外務省HP／国際連合広報センターHP／参議院HP／衆議院HP／首相官邸HP／千歳市『千歳市史』1969年、『増補千歳市史』1983年／内閣官房アイヌ総合政策室HP／北海道アイヌ協会HP／北海道アイヌ政策推進局アイヌ政策課HP／『千歳民報』

第2節 文化の継承と普及

第1項 文化の保存と伝承・普及

千歳アイヌ文化伝承保存会

本会の規約によると北海道ウタリ協会千歳支部(現・北海道アイヌ協会千歳アイヌ協会)に所属する機関として平成2(1990)年1月1日に設立し、その目的は「千歳における有形無形のアイヌ文化の伝承保存を図り発展させる」ことである。具体的な事業として掲げられているのはアイヌ語とアイヌの衣食住、年中行事、祭事等と伝統的芸能の保存伝承である。会の発足に尽力したのは初代会長の中本ムツ子であった。本会の大きな特徴は入会申出書を提出し承認を得れば誰でも入会できることである。これはアイヌ文化を大切に思う者であれば属する民族を問わずに受け入れ、伝承保存活動のすそ野を広げていきたいという強い想いによるものだった。

5年5月20日に「アイヌの伝統的芸能と工芸技術」が市の無形文化財に指定され、同時に本会がその文化財を保持する団体に指定された。

また、国は古くから伝承されてきたアイヌの舞踊を昭和59(1984)年1月21日に「アイヌの古式舞踊」の名称で重要無形民俗文化財に指定した。この文化財を保持する団体は、道内各地の保存会で構成する北海道アイヌ古式舞踊連合保存会である。平成6年12月21日に千歳アイヌ文化伝承保存会は古式舞踊を伝承する団体の指定を受け、北海道アイヌ古式舞踊連合保存会に加入した。このことにより千歳の古式舞踊は国指定の文化財に認定された。(詳細は11章4節参照)

会の発足以来、カムイノミなどの祭事とその作法の復元をはじめ、ウポポやホリッパなどの伝統的な唄や踊りの復活や伝承に努め、その成果を広めようと千歳アイヌ文化発表会を主催してきた。また、刺しゅうなどのア

アイヌの伝統的な工芸技術の習得と伝承にも力を入れてきた。一方、学校教育の場で歌や踊りを披露し指導するなど子どもたちへの積極的な普及活動も行ってきた。その中で野本久栄を中心に取り組んだ末広小学校におけるチセの復元とアイヌ文化学習の支援は大きな成果を上げた。全国で初めての試みはアイヌ文化を学校でどのように学習していくかを実践した好例と言える（詳細後述）。これらの活動を評価され16年度にアイヌ文化振興・研究推進機構（現・アイヌ民族文化財団）よりアイヌ文化奨励賞（団体）を受賞した。

なお、歴代の会長は次のとおりである。初代中本ムツ子（H2）、2代目石辺勝行（H23）、3代目野本久栄（H27）、現在は4代目石辺勝行が28年から就任している。

アイヌ文化の復活

千歳におけるアイヌ文化の伝承 千歳は古代から江戸時代、明治時代初頭に至るまで日本海と太平洋を結ぶ河川などの内陸交通の要であり、さまざまな文化や物資が行き交う地域であった。このため本州からの物資は比較的容易に入手が可能であり中世以降、漆器や太刀、鉄鍋などの物品はアイヌの物質文化に波及し深く浸透した。それらは自分たちが作り出す道具と同様に生活に欠くことのできないものとして定着していった。一方で儀礼や慣習、信仰などの保守的な精神文化はアイヌ社会の中で根強く伝承されてきた。

しかし、明治以降はアイヌ文化を封印する同化政策の強化と差別的な社会背景の中で文化が失われていった。アイヌ文化が表出することとはなくなり、儀礼や口承文芸、踊りなどが家庭や限られた地域の生活の中にとどまった状態で継承されるようになった。その結果、千歳においても女性が担う日常的な生活文化が、外部からの影響をあまり受けずに伝承されるこ

とになった。このため千歳のウポポやホリッパは、古い様式の素朴なりズムや所作を残していると評価され、フチたちが継承してきたユカラやウエペケレなどは、貴重な口承文芸として高い評価を受けることになった。

狩猟やサケ漁などに伴う様々な活動と節目に必要なカムイノミなどは男性が担う文化である。生産活動やカムイノミなどの儀礼は、必要に応じて個人や家内で個別に行うものが大部分であった。明治以降は、狩猟やサケ漁などが禁止されて非日常化したため、男の担うアイヌ文化の多くが消失していった。現在、千歳アイヌ協会や千歳アイヌ文化伝承保存会は、エカシやフチたちの記憶をたどり、カムイノミにおける千歳固有の所作や作法を復活するなど、地道な伝承保存活動に取り組み成果を上げている。

このほかに刺しゅうやゴザの製作、木彫などの伝統的な工芸技術の習得や伝承も行われており、その成果は秋季に市民文化センターで開催する千歳アイヌ協会主催の「千歳アイヌの伝統工芸作品展」（現・伝統工芸品等展示公開体験事業）で披露されている。

次に千歳で伝承されてきたアイヌ文化の一端を紹介する。

カムイとアイヌ アイヌ語のカムイは日本語では神と訳される。アイヌ文化では世界はアイヌとカムイによって成り立っているという。アイヌは人間である。ではカムイとは何か。動物、植物、病気、自然現象など、アイヌにはない力を持つていてすべてのものを表す言葉である。ただしその関係はアイヌがカムイに従属するのではなく平等であるという。

カムイはカムイの国でアイヌと同じような姿で生活をしているが、魂なのでアイヌの目にその姿は見えない。アイヌが見えるときのカムイは、余所^{よそ}行きの着物を着ているとき。例えばクマのカムイがアイヌへの土産にたくさんの肉を背負い、立派な毛皮の着物を着てアイヌの国に来るとヒグマの姿に見えるのである。アイヌはカムイが持ってきた着物（毛皮）や肉

をいただく。その時は感謝の意を尽くしてイナウをつくり祈りをささげ、トノト（酒）やシト（団子）などのたくさんのお土産を持たせてカムイの国に魂の姿で帰ってもらうのである。

カムイノミ（カムイ 神・ノミ →に祈る）様々な行事や行動、活動する際に行う神への祈りのこと。アイヌにとって最も身近なカムイは火のカムイである。毎日の料理や暖をとる時に火のカムイにお世話になる。アイヌ語でアペ（火）フチ（おばあさん）カムイといい、他のカムイへの取り次ぎをしてくれる。炭や薪のはぜるパチパチという音がアペフチカムイの声だという。いろいろにはチェホロカケプイナウ（逆さ削りのイナウ）がささげられる。

千歳では本来イノンノイタク（祈りの詞）は口の中で語り大きな声では発しないが、一般に公開しているカムイノミの際はアイヌ文化普及の観点から見学者に聞こえるよう発声している。所作でも出席者のトゥキ（漆碗）にトノトを注ぐ際は左側から注ぐのが一般的であるが、千歳では右側から注ぐなどの独自の作法がある。アイヌ文化普及のため1月にアシリパノミ（アシリ 新しい・パ 年・ノミ 祈り）と9月にアシリチェプノミ（アシリ 新しい・チェプ 魚・鮭・ノミ 祈り）を行い一般に公開している。

イナウ カムイノミで欠かせないものがイナウ。カムイノミはイナウ作りから始まるというくらい大切な祭具である。その役割はカムイへの捧げもの、願いをカムイへ届けてくれるもの、カムイが一時的に宿るところ、イチャルパ（先祖供養）では祈りや供物をあの世へ届ける役目を担うなど大変幅広い。イナウの材料には木肌が白く美しいミズキを使う。直径が3〜4センチの真つすぐで節のないものを選び、長さ70センチ前後に切りそろえて少し乾燥する。

イナウ作りをアイヌ語でイナウケ、使う専用の刃物をイナウケマキリという。男が担う作業である。樹皮をむき木肌に刃を当て手前に引くとクルクルとカールのかかったキケ（削りかけ）ができる。しかし、木の乾燥具合や刃物の切れ味、刃を当てる角度や力の入れ方などが整わなければ美しいイナウはできず、実際には大変難しい作業である。イナウには様々な種類があるが、囲炉裏のアペフチカムイに捧げられるのはチェホロカケプイナウでありイチャルパ（後述）の際もこのイナウをたくさん立てる。なお、千歳ではイナウに自分の系統を表す印であるシロシを刻まない。

イクパスイ イナウと同様にカムイノミで欠かせないのがイクパス（イク 酒を飲む・パスイ 箸）である。カムイノミの際にトゥキと呼ばれる漆碗からトノトをカムイに捧げるための祭具である。日本語では捧酒箸やその形状から捧酒箸とも表記される。木製で長さは30センチ前後、幅は2〜3センチほどの筥状で一方を尖らせている。この尖った方にトノトをつけてイナウなどにその滴を落とす。材料はヤナギやミズキ、イチイなど様々である。断面は薄いカマボコ形で表は単純な刻線文のほかウロコ文などがいてねいに彫られているものが多い。裏は平滑に仕上げられるが、先端の尖った部分にはパルンペ（舌）と呼ばれる小さな三角形の切込みが彫られる。これは人間の言葉をカムイに伝える役目があり、パルンペがないイクパスイをカムイノミで使ってはならないという。

新千歳空港建設に伴う遺跡発掘調査では400年以前のイクパスイが出土した。材質に北海道では自生していないスギやヒノキもあり、当時本州から持ち込まれた桶や樽などの横板も使われたと考えられている。

トゥキ カムイノミでイクパスイと対で使うのがトゥキと呼ばれる漆碗である。漆碗は一般的にイタンキというがカムイノミに使うものをトゥキと呼ぶ。カムイに捧げるトノトを入れる器として、タカイサラと呼ばれる

天目台にのせて使われる。

漆碗をトウキと呼ぶ手がかりを得るには、アイヌ文化の母体とされる擦文文化の時代までさかのぼる必要がある。当時本州では約1200年前の奈良時代にあたり、タカサラ（高盤）と呼ばれる脚のついた背の高い皿や碗より浅く皿より深いツキ（坏）と呼ばれる土師器や須恵器の食器があった。これらは擦文文化へも伝わっており、祭事の際にツキトウキをタカイサラに乗せて使い、やがてアイヌ文化が成立していく過程で坏が漆碗への置き換わりが進んだと思われる。しかし、祭事を構成する大切な祭具の呼称は置き換えが起きず、そのままトウキが使われ続けてきたと考えられる。天目台をタカイサラと呼んでいるのも同様の事由であろう。天目台は中国の宋の時代（960―1279年）に焼かれた天目茶碗の台である。底が小さく不安定なために台が作られた。日本には茶碗と一緒に鎌倉時代に入ってきたという。以後、天目茶碗とともに日本国内でも作られるようになった。



写真15-2 ヌサ
アシリチェップノミにて（H30）

ヌサ（ヌササン）

チセの側やカムイノミの際に屋外であれば東側に設けられる祭壇。左側から

シリコロカムイ（大地の神）、ワツカウシカムイ（水の神）、コタンコロカムイ（村の神）の3神を祭り、それぞれにイナウを立てる。ほかにストウイナウという樹皮を残したイナウや、ハシイナウという小枝と樹皮を残し

たイナウも飾られる。

ヌサはカムイが通るところであり、人がヌサの前を横切ったり、ヌサから後方の神域である空間へ立ち入ることは厳しく禁止されている。

イチャルパ チェホロカケブイナウをたくさん立てて食べ物や飲料水、酒、たばこなどを供え、死者や先祖をしのび供養する儀式。カムイノミを行う際には欠かさず行う。フチによると千歳では人を大勢呼んで行うイチャルパをシヌラッパという。

ユカラ アイヌ文化の代表的な口承文芸の一つ。英雄を主人公にした物語に節をつけ「サケヘ」という合いの手を入れながら唄うように語る。昔はレブニ（レブニ拍子をとる・ニニ木）という名の木の棒で炉杵を叩いて拍子をとった。神々を主人公にした物語はカムイユカラという。千歳の第一人者は白沢ナベフチであった（伝承者の詳細は後述）。

ウエペケレ 現実の世界を舞台にした物語。唄わず節をつけず、拍子もとらずに語られる。ユカラのような「サケヘ」も入らない。

ウボボ 女性がシントコの蓋を中心に車座になり、その蓋を手で叩き拍子を取りながら唄う唄。

ヤイサマ（シノツチャ） 即興の歌。現在の心情や過去の出来事などを、ヤイサマナナという囃子言葉を入れながら即興の歌詞で表現する。この歌に合わせて皆が踊ることもある。

ホリツパ 様々な行事の際に参加者が輪になって踊るアイヌ文化の基本的な踊りである。サルンクル域（沙流川と千歳川の流域）以外の地域ではリムセといい、ホリツパは凶事の際の行進をいう。意味合いが逆転している理由は不明である。千歳には5つの代表的な踊りがあり、これらを組み合わせる。各踊りに関連性はなく、踊り手の掛け声をきっかけに別の踊りに移行する。踊りに名称はなく掛け声により「ホイヤーホー」、「フチ



写真15-3 ホリッパ
アシリチェップノミを終えて (H22)

トノアンナ」「イッケウエ」「ハ
ンニシポハラホイ」「カムイラン
ナー」に区別されている。

ハラルキ 一般的に鶴の舞と称
される踊りの一つと思われるが、
千歳では各同人数の女性グルー
プが縦に並んで向かい合い、着物の
袖口を持ち胸の前で腕を畳んだり
広げたりしながら体を上下し、鶴
の鳴き声をまねながら激しく踊る。

途中で「コーテス、コーテス」と

言いながらバレーボールのコートチェンジのように場所を交代し、列の先
頭を替えながらどちらかが疲れて止めるまで踊り続ける体力勝負の対抗戦
である。語源はパルルイーキ（パルルおぐル上下する・ルイー激しい・
キルをする）であろうか。

シケレペシト 千歳に伝わる伝統料理の一つである。シケレペとはキハ
ダの実のこと、木はシケレペニという。キハダはミカン科の落葉樹で日本
全国に生えている。内皮は黄色く染料になるほか、強い抗菌作用の成分を
含んでいることから健胃整腸剤の生薬でもある。丸く緑色の実が房状にな
り熟すと黒くなる。このところを見計らって採集し、房から外した実だけを
天日でよく乾燥する。固くシワシワに縮んだ5ミリの実は保存すること
ができる。シトはアイヌ語で団子のこと。生の米をニス（臼）に入れイウ
タニ（杵）で突いて粉末し、お湯を加えてよく練り一口大に丸める。水で
戻し種を除いたシケレペと一緒に煮る。砂糖が入り、粗い米の粉（エポイ）
でとろみをつけると餡ころ餅のようになる。独特な風味（苦味？ミント

味？）と香りがあり好みに分かれる。

イテセ ゴザを織ることをいう。ゴザはチタラペといいチセの床に敷い
たり、壁に下げたりする大事な調度品であった。材料のシキナ（シ本当
の・キナ草）はガマの葉である。8月中頃から9月に刈取り両腕を広げ
た長さに切り良く乾燥する。使う時は水で戻しイテセニ（ニ木）という
織り台と、ピツと呼ばれる小石に巻き付けた糸を使ってムシロを編むよう
に織っていく。シキナの葉はスポンジのような構造で空気をたくさん含ん
でいるため、柔らかく弾力があり断熱性も優れて厳冬の冷気を遮る効果が
ある。カムイノミの際には特別なチタラペが敷かれる。

千歳アイヌ語教室

言葉は文化の主体性やアイデンティティを構成する絶対的な要素であり、
不可欠なものである。文字を持たないアイヌ民族は固有の言葉を用いて自
らの歴史や地名、知恵や知識などを幾代にも渡って言い伝えてきた。しか
し明治時代から始まった政府の同化政策によりアイヌ語の使用を禁じられ
固有の言葉を奪われてしまう。アイヌ語を外で使う機会を失うが、明治か
ら昭和初頭頃までは、集落内や家庭の一部でアイヌ語の会話があった。こ
の時期に幼少期を過ごし、日本語を学んだ古老たちはアイヌ語と日本語を
理解できるバイリンガルであり、後のアイヌ語研究やアイヌ語教室などの
大きな支えになった。

アイヌ語の復活はアイヌ民族の復権とともに、アイヌ文化への誇りや
尊厳を取り戻していくことと、アイヌ文化を良く理解するために不可欠
であった。北海道ウタリ協会は道内各地でアイヌ語教室開設し、平成21
（2009）年までに14教室が開講した。千歳では3年8月に開講した。
講師は当時70から80歳代の小田イト、白沢ナベ、北野ハル、山川キタらの
フチたちが務めた。教室は毎月2回、2時間の予定で開講した。言葉と

もに伝統料理や伝統工芸のゴザ編みなど、アイヌ文化全般にわたり学習が行われ、千歳を中心に札幌市や苫小牧市などの近郊市町からも参加があった。学習の成果はアイヌ民族文化祭などのアイヌ語寸劇で発揮された。また、講師の白沢ナベフチが語ったウエケレや小田イトフチが語ったカムイユカラを和訳し、絵本にして刊行するなどアイヌ文化の普及に貢献してきた。

美笛のシラツチセのカムイホブニレ

「シラツチセ」は（シラル＝岩・チセ＝家）であり、岩屋や岩陰を意味するアイヌ語である。山深い美笛地区のシラツチセは明治以降に営まれた狩猟に伴う野営地であり、アイヌ文化の儀礼の場でもあった。近代に入ってもなお人知れず行われてきたアイヌの真摯な精神文化を示す数少ない事例である。昭和58（1983）年に千歳市教育委員会が調査を行った。

地形 支笏湖の南西部に今から約4万2000年前の支笏火山の大噴火による噴出物でできた標高約500^{メートル}の台地が広がる。支笏湖側の台地縁辺では凝灰岩が露頭し、湖面からの高さが100^{メートル}ほどの切り立った崖である。この崖は湖岸の美笛船着場（川口）から3マイルの地点にある「三哩の沢」と呼ばれる旧美笛川支流の右岸に沿って屏風のように連なっている。アイヌ語ではこの沢を「クツパオマビプイ（クツ＝断崖・パ＝上に・オマ＝入る・ビプイ＝美笛川）」と呼んでいた。屏風をなす凝灰岩の崖は、所々で柱状節理が貫入し硬軟が様ではない。

台地崖には雨水や雪解け水などが流れ落ち、台地縁辺の崖地はあちこちが虫に食われたように馬蹄形に侵食されている。この馬蹄形の崖下では、やわらかい部分が崩れ落ちてオーバーハングとなり岩陰を作り出している。調査した馬蹄形の地形は、幅が約40^{メートル}、奥行き30^{メートル}でその先端部に高さ12^{メートル}、奥行き2〜4^{メートル}、幅50^{メートル}の三日月形の岩陰ができていて、崩れ落ちた土砂がテラス状に堆積し正面から見るとドームに覆われた屋外ステージの



写真15-4 シラツチセ全景
白桦部分に小さなシラツチセがある 白桦右の柱状の岩の右側が大きなシラツチセ

ようであった。この大きなシラツチセは、雨が吹き込まず冬も雪が積もらないため、狩猟の際の大切な野営地として昭和25年頃まで利用していたという。また、慶応4（1868）年7月、白老の仙台藩陣屋で任に当たっていた藩士たちは、官軍の襲撃情報を受け陣屋から撤退した。その際に藩士たちはこのシラツチセに潜伏後、小樽に出て船で帰国したという。

馬蹄形の中央部分は一段低くなっており、200平方^{メートル}ほどの広場がある。そこには崖から落下した1辺が4^{メートル}前後の大岩が点在する。

この岩陰の西端に柱状節理の下端が崩れて出来た小さなシラツチセがある。高さ約2・3^{メートル}、幅約2^{メートル}、奥行き約1・5^{メートル}である。内部にはヒグマの頭蓋骨などが置かれていた。

大きなシラツチセ 中央に小熊を入れるための木製のオリが据えられていた。長さ80〜135^{センチ}、幅10〜30^{センチ}、厚さ4^{センチ}の割り板14枚を井桁に組み合わせ、根方には補強のため人頭大の石を埋め込んでいた。割り板は鋸



写真15-5 小さなシラッチセのヒグマの頭骨
少し下ると大きなシラッチセがある (S58.5)

を使用した痕跡がなく、斧やナタなどの刃跡があり樹皮が付いたままであった。オリと共に長さ77^{センチ}の木の中央をV字形にえぐったエサ入れが置かれ、オリには山を下るまで大切に飼われていた子熊の毛も残されていた。このオリがいつ頃、誰によって作られたかは不明である。ほかに長さ1^{メートル}ほどの長さに切れ縦に半裁された薪が60本も備えられており、天井の岩は焚火の煤で黒^{すす}ずんでいる。地面にはカンジキ、まな板、木製のヘラなどの自家製道具類もあった。これらは25年頃まで岩陰を利用した猟師たちが残したものであった。

小さなシラッチセ ここには13頭分のヒグマの頭骨が置かれていた。下顎骨がないものもあったが発掘調査の結果、10^{センチ}下の土中から下顎骨が見つかり上下のそろった頭骨は8頭分であった。側頭部が残る頭骨で左右いずれかに人為的にあけられた孔があったが、これは捕殺された熊がアイヌ文化の作法に従い処理されたこと示す証であった。アイヌ文化では熊も重要な食料である。様々な部位を利用し脳も食したが、取り出す際の側頭部の孔の位置は雄が左側、雌が右側と定められている。岩陰の頭骨の性別と孔の位置はその定めと完全に一致していた。

頭骨以外にはイナウやイナウケマなどヌサに使われた木製品が岩陰の壁に立てかけられ、一部は土中からも見つかった。この場に捕殺した熊の魂を神の国へ送る神聖なヌサがあったことは確かである。

この岩陰は生業空間である隣の大きな岩陰とは貫入する柱状節理によって隔てられており、やや高みの位置取りは神聖な空間にふさわしいものであった。

ヌサがいつ造られたかは不明確であるが、子どもの頃(昭和の初期)に父親と訪れた事のある古老は、すでに白化した頭骨を見たといい、当時も使われていた状況にはなく父親もいつ頃のものかは知らなかったという。

では、だれが祭ったのであろうか。イオマンテと呼ばれる集落で行う飼熊送り儀式とは異なり、狩猟によって捕殺した者が山で直接行う儀式は人目に付くことはない。手がかりは、木製品の中のイナウにあった。イナウにはシロシが刻まれたものと、刻まれていないものがあった。千歳アイヌはイナウにシロシを付けない習慣がある。シロシを刻むのは千歳以外のアイヌであり、地理的な条件を考慮すると白老域のアイヌの可能性が高い。

カムイホプニレ 昭和58年6月12日、長い間にわたって山深いシラッチセに置かれてきた熊の頭骨を慰霊し、神の国に送る祭事(カムイホプニレ)が現地でアイヌの伝統的な儀礼によって行われた。主催したのは千歳文化財保護協会で、開催に尽力したのは同協会事務局長の林元一であった。林は北海道ウタリ協会千歳支部の協力のもと、参加者への案内や資材の調達、道具類の準備、参加者の送迎、そして慰霊祭の記録に奔走した。カムイノミには蘭越地区に住む70歳を超えるエカシやフチたちも急峻な沢を自力で登って参加し、総勢50人ほどが参加する盛大な催しになった。山の木々は新緑に輝き、まだ葉々の小さい木々の間から陽がこぼれる絶好の天候に恵まれた。エカシやフチたちは、無事に沢を登れたことや天気が良いことをカムイに感謝した。

カムイノミは、祭主を依頼された静内町の高田勝利エカシによって朗々と唱えられるアイヌ語の祈りから始まった。神への祈りが終わるとトノト

が振舞われ、やがてウポボやホリッパがにぎやかに行われた。昼食を終え
ると神の国へ祈りを伝えてくれたアペフチカムイに感謝するカムイノミを
行い無事終了したのである。

イノンノイタク イノンノイタクとは、祈りの詞という意味で今回の祭
主を務めた高田によってアイヌ語で唱えられた。ここでは千歳文化財保護
協会事務局が行った和訳（『ちとせぶんか』1983年）の概要を紹介する。
高田は、岩陰側に並べられた頭骨に向かって語り始めた。

この熊の神々に対して、今までにもカムイイオマンテ（神送り祭）を行っ
てきたようですが、長い間ここにこうしてさらされていたようにも見えま
す。その事をみんな気にかけていました。今日の祭りは、シサム（和人）が
言い出したとのことですが、天上の神の国へ熊の神の霊をお送りするため
に、立派な祈りの詞とイナウと一緒に捧げ拝礼します。

今から神々のいる美しい天上の国へ熊神の霊をお送りする為に、昔お祭り
した熊神の頭骨の前に立派な神々に来ていただき、長老達がたくさんのイナ
ウを、美しいイナウキケやハシイナウ（小枝を持つイナウ）とともに捧げ、
うやうやしく拝礼します。

昔お祭りした熊神の頭骨の前に、お酒とともに美しい着物を捧げ、人々が
皆うやうやしく幾度も拝礼しています。

ここで祈りの座を炉端に移し、炉を中心に向かい合って座していたエカ
シやフチたちとともにアペフチカムイに対してトノトがトゥキからイクパ
シイによってささげられ、イノンノイタクが再び始まった。概略は次のと
おりである。

国をおさめる神よ、昔、熊神の頭骨をお祭りした古老たちが豊かなコタン
（村）で暮らしています。今、私たちは相談してこの山の中で神々をお招きし、
昔この山で獵をした古老達と共に熊神の頭骨を拝礼しています。神々への祈

りの詞を私が皆に代わって申しあげます。人々は皆、神々の霊をお送りし、
お祈りをしています。

コタンの人々は、神々のお恵みに浴し豊かに暮らしています。私たちは共
にヌササン（祭壇）の神や、山を治める神様などの立派な神様にうやうやし
く拝礼しています。熊神の霊を天上の神の国にお送りするために長老達と
もにお祈りしています。美しい千歳の村で暮らしている男達も女達も今こ
で熊神の霊をお送りしています。

シベチャリコタン（静内）から参りました私も、コタンのアイヌとそれ以
外の人も共に拝礼しています。水の神やヌササンの神、火の女神にも、うや
うやしく拝礼しています。コタンの人もそれ以外の人も共に語り合い、熊神
送りの祭りを立派に行おうと拝礼しています。

貴き火の女神様、そして水の神様、神の鳥よ、多くの神々に私の申し上げ
る祈りの詞をお伝えください。私達は神々に感謝して暮らしています。今、
エカシやフチ達と共に神々にお礼を申し上げています。貴き神々へのお礼の
品として美しいイナウとともに、トゥキからお酒を神々に捧げています。

神の鳥よ、私の申し上げるつたない祈りの詞を神にお伝えください。本当
の獣の神である熊神の霊を、私達は神の国へお送りしています。今、私達は
山を支配している熊神の霊をお送りしています。貴き神よ、私達がそろって
心から拝礼申し上げ、神々に感謝しながら暮らしている姿をご覧になってく
ださい。

私達は神々へのお礼の言葉にそえて、たくさんの立派なイナウをおいしい
お酒とともに、感謝をこめて捧げるものであります。

このような内容のイノンノイタクが抑揚のある朗々とした語り口で唱え
られたのである。実際には同じ詞の繰り返しや飾り詞が多く含まれ、祈り
はもつと長大なものであった。

頭蓋骨の分析から見えるアイヌの熊猟 頭蓋骨の分析によると、ここで

祭られていた熊の捕殺時期は3月から6月までの間で、いわゆる春熊猟によるもの。年齢は2歳未満が5頭、10歳以上が8頭で、うち5頭が雌であった。ヒグマは通常3歳頃までは母熊と一緒に行動する。2歳未満の5頭の小熊はそれぞれ10歳以上の5頭の雌熊と親子だった可能性が強い。

成獣の鼻腔に長さ4^{センチ}の鉄片が突き刺さっていた。これは冬ごもりの穴から突き出した鼻先を、上から突き刺した槍などの破片が残留した可能性が強く、春の穴熊猟の様子を具体的に示す貴重な例であった。

千歳のアイヌ文化に関わる出版活動

記憶という方法で伝承してきたアイヌ文化を様々なメディアを駆使して記録することは文化の保存と継承の有効な手段である。その中でも出版は従前から最も活用された手段であり、普及でも優れた効果を発揮してきた。千歳のアイヌ文化についての出版は学術的な調査研究に伴うものが多く、その分野は民俗学、民族学、文化人類学、考古学、言語学、文学などの多岐にわたる。それらの調査研究成果は大学や博物館の研究紀要、学会誌などに掲載されてきた。また、昭和50年代以降から市内で新空港や高速道路などの建設工事に伴う大規模な埋蔵文化財の発掘調査が相次いだ。これにより実態が不詳だった中近世のアイヌ文化に光を当てる多くの重要な発見があった。その成果は調査報告書として刊行されているほか、『新市史(上)』や一般向けの概説書などでも詳しく紹介されている。

北海道教育庁は昭和56(1981)年からアイヌ民俗文化財調査を開始した。北海道が全道規模で本格的に行う基礎調査である。平成元(1989)年度、2年度、5年度に千歳を対象に古老からの聞き取り調査を実施した。その調査記録は『アイヌ民俗文化財調査報告書』IX・X・XIIとして北海道教育委員会から発刊されている。

専門的な調査以外での注目すべき出版活動を見ると、まずは昭和51年4月に発刊された『ちとせ地名散歩』がある。著者は千歳在住の作家長見義三^{おさみぎ}であった。長見はアイヌの人々と深い交流があり、その文化や歴史を大切に考えていた。この本のあとがきの冒頭に「身の周りの古い地名にひかれたのは、時間を超えての語りかけが感じられたからである。その訳を理解し、その地点を知りたいという願いからこの「地名散歩」が始まった」とある。市内の地名の多くはアイヌ語が起源である。長見はいくつもの川筋をたどりながら各地の地名を解釈し、アイヌが見てきた原風景にたどり着く作業を続けた。そして今ある千歳の地名の多くが意味あるアイヌ語に根ざしていたことが明らかにした。平成6年6月に同年4月に没した長見の遺稿として『ちとせのウエペケレ』が妻俊子の手によって刊行された。千歳で伝承されてきたウエペケレのもとに長見流に言葉をにつづった13話の物語が納められていた。後に英語版、セルビア語版、ベトナム語版、ハンガリー語版、ロシア語版が出版されている。

ユカラに注目したのは千歳文化財保護協会事務局長だった林元一である。フチたちが伝えるカムイユカラを録音し、フチたちの協力を得て独学で和訳した。最初に冊子化したのは昭和59年の白沢ナベが伝える火の神様のユカラ『火の姫神の自伝』であった。続いて山川キクが伝える雷神のユカラ『雷神の自叙』もまとめている。なお、林はアイヌ文化も含めた地域の文化財の保護に功績があったとして平成5年に北海道文化財保護功労賞、14年に千歳市教育功労表彰を受賞している。

5年3月に『火の神の懐にて』が刊行された。児童文学者の松居友が、近所に暮らしていた小田イトとの交流の中で、フチの語る人生を通して日常生活に根付いていたアイヌ文化を丹念に紹介している。アイヌ文化がもつ豊かな精神文化を示す作品である。なお、この作品の挿し絵を描いたの

は千歳在住の西山史真子であった。アイヌ文化への深い理解と卓越したデッサン力を持ち、この後、多くのアイヌ文化に関する絵本や解説書の挿し絵を描くことになる。

7年2月に『アイヌ語千歳方言辞典』が刊行された。著者は千歳をフィールドに活動してきたアイヌ語研究者である千葉大学の中川裕であった。この辞典は千歳のアイヌ語単語約3700語をアイウエオ順にカナを見出しに配列し、ていねいな解説と例文が加えられている。アイヌ語の千歳方言の語彙集としては最大のものである。語彙と例文の多くは千歳在住のフチたちから採録（録音）したウエケレやカムイユカラからの引用であり、例文末には原資料を示す符号を示している。例えば誰が語った言葉なのか、が即座に理解できる。話者は千歳在住の白沢ナベ、山川キク、小田喜代作・イト夫妻、中本ムツ子であり、以後、中川はアイヌ語を切り口に話者たちとともに解説書や絵本などで千歳のアイヌ文化を数多く紹介していく。同年12月には監修中川、語り白沢ナベ・中本ムツ子の『カムイユカラ』が出版された。本編に解説書とカセットテープ1巻を付し、6話のユカラを収録した絵本である。千歳で伝承されてきたユカラに取り組んだ初の本格的な絵本になった。本編は見開きの左ページにアイヌ語をカタカナとローマ字で併記し、右側に絵を配した構成で和訳は解説書に載せている。テープに録音された話者のユカラを聴きながら絵本を読むことも可能にした。音声は言葉の発音やアクセント、節回しなど目に見えない様々な情報を提供し、話者たちのそばで聞いているような臨場感のある絵本になった。9年に『アイヌの智慧ウパシクマ』1が刊行した。ウパシクマとは「先祖からの言い伝え」などと解され家族の中で伝承されてきた生活の知恵のことである。本書は中本ムツ子が子供の頃に祖母や母親から聞き体験したウパシクマである。ページ上半に絵を配し、下半にアイヌ語のカタカナ表

記とローマ字表記、和訳を併記。さらに場面ストーリーを和訳と英訳の文章で示し国外も意識した構成になった。13年には2が刊行され完結した。

千歳アイヌ語教室は3年から運営が始まった。11年には開設当初に講師を務めていた白沢ナベフチが語ったアイヌ語のウエケレを『ウラウシナイの男の子』と題し完全和訳版の絵本として発行した。その内容はウラウシナイという村で暮らす一人の男の子が成長し、人として正しく一生懸命に生きて幸せに暮らしたというシンブルなもので、アイヌ文化が描く良き人生観そのものである。短編ではあるがアイヌ文化の伝統的な生活習慣、作法や知恵が随所に含まれていて興味深い。13年には2作目の絵本『カンナカムイとむすめ』を発行した。教室で講師をしていた小田イトフチが語ったカムイユカラを絵本にした。これらの絵本はアイヌ語教育に尽力を惜しまなかった亡きフチたちへの感謝と尊敬をこめてつくられた。30年3月、教室から新たな絵本が生まれた。100年前の千歳を舞台にした創作絵本『シコツコタンのもしりとレラ』である。四季折々のアイヌの生活や遊び、信仰などを紹介した。アイヌ語、日本語、ローマ字で表記し、物語を語ったCDも制作した。

18年には北海道ウタリ協会千歳支部が『ヘタクスケアンロー 千歳に伝わるアイヌの伝統料理』を発刊した。フチたちの高齢化による食文化の途絶に強い危機感を持つて作られた。アイヌ自身がアイヌのために書いたアイヌの料理本であるとうたった画期的な出版であった。千歳に伝わる色々な料理のレシピが豊富な写真やイラストを使いながら分りやすく書かれている。レシピの指導は蘭越生まれの上野清子が行った。上野はフチたちから料理を学び次世代への伝承を担ってきた。カムイノミに必要なトノトづくりの名手でもある。

7年に末広小学校に全国で初めてアイヌのチセが教室に復元され、8年

からは末広小の1～6学年までの一貫したカリキュラムにアイヌ文化の学習が位置づけられた。ここで15年間にわたって実践してきた学習の積み重ねを集大成した『さあアイヌ文化を学ぼう！』が、21年に末広小のアイヌ文化学習を支援する会から出版された。学校という環境にチセを中心とする本物のアイヌ文化を持ち込んで学習する大切さや教育効果などが述べられている。学年別の学習内容の詳細とともに道内各地の学習の紹介などがある。学校現場でアイヌ文化学習を実践する際の指針となり、具体的な事例を示した手引書ともいえる。関連して23年に『チセのある学校』が出版された。著者は末広小でアイヌ文化学習のきっかけを作った佐々木博司教諭と同校に勤務していた田中美穂教諭である。小学校を舞台に繰り広げられたチセづくりとアイヌ文化学習の顛末が記されている。

22年に日本語で語った物語をアイヌ語に翻訳するという従来と逆の観点から作られた『中本ムツ子のウエペケレカンナフチヤイエイソイタク』が刊行された。元になったのは中本自身が経験したことやフチたちから学んだこと、アイヌ文化の人生観などを日本語で語ったウエペケレである。アイヌ語への翻訳は中川裕が行った。

26年に千歳の烏棚舞が舞台のカムイユカラを絵本にした『きつねのチャランケ』がDVD付きで刊行された。原作はアイヌ文化伝承者の萱野茂が平取町の古老から聞き記録したユカラであった。著者は千歳在住の野本敏江と苫小牧在住の墨谷真澄。2人は千歳アイヌ語教室が縁で知り合い、ともにアイヌ文化活動アドバイザーとして小中学校への出張授業でカムイユカラなどを伝えてきた。訪問先の東千歳中学校の生徒から「CDやDVDにしないのですか」と聞かれたのが絵本化のきっかけという。絵は東千歳中学校の美術担当の教諭竹津昇が担当した。短編であるがアイヌ文化の自然観を伝えるカムイユカラの絵本である。

出版には多額の経費が必要であるが、アイヌ文化振興・研究推進機構は出版助成事業を実施しており、資金面で厳しい小さな組織や個人の出版活動の背中を押す事業として大きな成果を上げている。

伝承者とその業績

アイヌ文化は文字を持たない文化である。故に知恵と知識は記憶し体得し、親から子へ子から孫へと伝承を重ねてきた。江戸時代になり松前藩や幕府のアイヌに対する圧力は次第に顕在化し、日常的なアイヌ文化を和人化しようとする。そして明治以後の政府による明確な同化政策によって言語をはじめ様々なアイヌ文化が否定され、差別的な扱いを受け、時間の経過とともに多くの文化が失われた。だが、文化というものは民族にとって欠くことができないアイデンティティであり、強制によって簡単にそのすべてを消失させることは困難といえる。アイヌ文化も集落や家庭の中で、あるいは狩猟などの中で細々ではあるが生き続けてきた。ここでは千歳のアイヌ文化を残し伝えてきた伝承者たちの代表として千歳市、北海道文化財保協会、アイヌ文化振興・研究推進機構から顕彰された者と業績を紹介する。なお記載している主な事柄は関係機関のホームページや、出版物などによって公開されている情報に基づいている。

白沢ナベ 千歳におけるカムイユカラやウエペケレなどの口承文芸の第一人者であった。明治38（1905）年に蘭越で生まれた。父は小山田サンレキテ、母はウサモントク。親しい人たちからは「ナベちゃん」と呼ばれ穏やかな人柄であった。幼いころから父や姉にアイヌ語やカムイユカラやウエペケレを残し伝えていけとよく言われたという。最晩年に次のように語っている。「アイヌの言葉、仕事、踊りを残さないと魂が亡くなってしまふ。と子供の時にお父さんからいつも言われた。年行けばいくほどお前は人に好かれる。アイヌ語を話す時がきつと来るとも言っていた。しか

し、生活に追われる毎日でゆとりもなく、人に伝えることなど考えることもできなかった。今、年を取って時間もできたので聞かれればしゃべるようにしている」。

高齢にもかかわらず積極的に伝承普及活動に応じ、乞われればどこにも出かけユカラやウエケレを披露した。平成4（1992）年4月に国立劇場小ホール、同年9月に遠野民話博覧会でカムイユカラなどを公演した。また、3年に開設した千歳アイヌ語教室の講師を当初から務めていた。採録や調査、絵本や辞典などの出版活動にも多大な協力をし、臆することなくアイヌ文化を伝えていった。

ナベフチはたぐいまれな記憶力の持ち主でユカラやウエケレが次々と湧き出てくる。採録する際にアイヌ語のユカラの後に和訳をお願いすると、ナベフチは和訳を覚えてはいないという。頭の中でアイヌ語をたどりながら和訳しているとのことで、時には途中からアイヌ語の説明になってしまいうこともあり、アイヌ語で育ったナベフチらしい出来事であった。採録が終わって今日はどうでしたかと聞くと「たくさん（アイヌ語を）喋れて良かったと思うよ」と答えるのが常だった。

昭和63（1988）年10月、様々な伝承活動の功績により第24回北海道文化財保護功労者賞を受賞したが、平成5年10月21日に87歳で急逝した。生前の伝承活動の功績により同年12月に遺族追賞として内閣総理大臣から褒状と菊紋の入った木杯が遺族に授与された。

中本ムツ子 昭和3年に蘭越で生まれる。両親ともアイヌ語を母語としておりアイヌ文化の環境下で育つ。14歳まで一緒に暮らしていた祖母からも大きな影響を受け、様々なアイヌ文化を学んだ。

50年代の前半、経営していたドライブインにフチたちを招きウポポやホリツパ、時にはユカラやウエケレを楽しむ会を始めた。反対する声も

あったというが、フチたちの笑顔が見たくて続けていたという。50年代後半から次第にアイヌ文化の保存や伝承活動が活発化し、千歳でもホリツパやウポポ、イカラカラやイテセなどの伝承保存活動が中本を中心に生活館で本格的に始まった。

中本は50年に北海道ウタリ協会千歳支部の副支部長に、53年には同支部文化部長に就任しアイヌ文化の復活と伝承に力を注いだ。さらに平成2年、千歳アイヌ文化伝承保存会の発足に尽力し会長に就任。3年に千歳アイヌ語教室が開講し運営委員長に就任。4年には札幌テレビ放送（STV）ラジオのアイヌ語ラジオ講座講師を務めるなど精力的に活動した。また、白沢ナベフチのユカラ公演では移動などをサポートしながら解説や和訳を担当し、ナベフチの口承文芸も学んだ。ナベフチが亡くなった時に「ナベちゃんからもっとたくさんのかたちを受け継ぎたかった。残しなかった」と無念の思いを吐露している。翌5年にアメリカのスミソニアン国立自然史博物館での「アイヌ・北方民族の精神」と題する特別展でユカラを公演し、14年にノルウェーで開催された世界口琴フェスティバルでユカラを公演するなど活動の場が海外に広がった。

中本の長年にわたるアイヌ文化の伝承普及活動は高い評価を受け、4年11月に第1回千歳市民文化表彰千歳市民文化奨励賞が授与された。また、16年4月には第38回吉川英治文化賞を、同年10月には第8回アイヌ文化賞を受賞した。

公演活動や学校でのアイヌ文化学習、絵本などの出版活動に労を惜しまず、アイヌ語と口承文芸の伝承に力を尽くし、普及活動に精力的に取り組んだ伝承者は23年4月28日にその生涯を閉じた。

小田イト 明治41年に長沼の馬追で生まれる。父は白鳥シナ、母はマクンという。幼少名はミヨで6歳くらいにイトと呼ばれるようになった。2

歳のころに一家で千歳のカマカに移る。結婚して蘭越（現・桂木）に居住。フチたちや親しい人たちからは「イトちゃん」と呼ばれていた。穏やかで謙虚で恥ずかしがり屋。アイヌ語が堪能でナベフチのユカラやウエペケレを聞きながら一人で笑い声をあげていた。当初はアイヌ語で話すことをためらっていたが、後に千歳アイヌ語教室の講師を務めるなどアイヌ語の伝承に尽力した。その他に刺繡や古式舞踊、伝統料理などの保存と伝承に大きく貢献した。また、イトフチの語った人生を記した『火の神の懷にて』は、フチが子供のころから日々の生活の中で守ってきた豊かなアイヌの精神文化や自然観を世に伝えるものとなった。

このような功績に対し平成10（1998）年に第2回アイヌ文化賞が授与されたが、12年7月に死去した。千歳市は生前の功績に対し同年の第9回千歳市民文化賞を故人に授与し顕彰した。

藤原信子 昭和11年生まれ。支部の伝承保存活動の中でアイヌの伝統的な刺繡に触れ、叔母の小田イトに師事してアイヌの刺繡技術を習得した。不断の研究と努力の結果は様々な工芸作品展において数々の入賞となつて実を結び、その技量は高い評価を受けた。また、刺繡の指導者となり平成12年からはアイヌ文化振興・研究推進機構のアイヌ文化活動アドバイザーとして学校での学習、展示会、講座などでその技術を伝えるべく積極的に活動し、15年からは同機構の実践上級講座刺繡講師を務めるなどアイヌ文化の普及と伝承に大きく貢献した。このような功績により18年度第10回アイヌ文化奨励賞を受賞した。

中村勝信 昭和19年生まれ。千歳アイヌ文化伝承保存会や北海道ウタリ協会千歳支部の要職を歴任し、特にアイヌ文化の発信に優れた手腕を発揮してきた。平成14年の古賀正男記念館（東京都）、20年の国立民族学博物館（吹田市）、22年に支笏湖温泉で開催された日中韓環境サミットなどで

披露された古式舞踊の企画や演出を手掛けた。また、様々なアイヌ文化への調査や出版活動に積極的に関わりアイヌ文化の普及と理解を深めるための黒子として尽力している。これらの功績により平成24年度第16回アイヌ文化奨励賞を受賞した。

野本久栄 昭和26年生まれ。男性が担うアイヌ文化を古老や研究者から熱心に学び習得してきた。カムイノミとともに彫刻などの工芸、イナウやイクパスイ、マキリ、タシロなどの制作に精通し北海道アイヌ民芸品コンクール伝統工芸部門で奨励賞を2度受賞している。平成7年、末広小学校にチセを復元する際にアイヌ文化の伝統的な建築手法を指導し、本物のアイヌ文化を実体験できる環境を整えた。また、1～6学年まで学ぶ一貫したアイヌ文化学習カリキュラムの実践に協力し、同年に末広小のアイヌ文化学習を支援する会の会長に就任。平成24年の同校の運動会で全生徒、全教員、保護者が参加するアイヌ古式舞踊（ホリッパ）を指導するなど教育現場での普及活動に努めた。

24～26年度は千歳アイヌ文化伝承保存会の副会長に27年度には会長に就任し、加えてアイヌ文化活動アドバイザーとしてアイヌ文化の普及のため全国各地に出向くなど幅広く活動してきた。25年度第17回アイヌ文化奨励賞を受賞した。

野本敏江 昭和26年生まれ。女性が担うアイヌ文化を学び習得し、アイヌ語、口承文芸や古式舞踊、刺しゅう、伝統料理などの見識をこつこつと広めてきた。夫の野本久栄とともに末広小のチセ設置やアイヌ文化学習に尽力し、アイヌ文化活動アドバイザーとして特に小中学校での普及活動に力を注いできた。また、千歳アイヌ協会の副会長を務めるなど協会の重責を担ってきた。

平成26年には同アドバイザーの墨谷真澄（苫小牧在住）とDVD付きの

ユカラの絵本を刊行するなど新たな一面が活動に加わった。26年度第18回アイヌ文化奨励賞を受賞した。

伝え残す強い思い このほか顕彰歴はないが、石田ナカ、石田ミツエ、上野清子、小山田喜代作、小山田直美、小山田ハヤ子、小山田ミヨ、北野ハル、山川キクなどの多くのエカシやフチたちが伝承や保存、調査活動に協力してきた。

伝承者たちに共通するのは、アイヌ文化への誇りであり、伝え残したいという確たる意思である。アイヌ文化を理解してほしい、知ってほしいという思いも強い。フチたちは一般の家庭人だった。当初、公衆の面前でのウポポやホリツパには抵抗感があったという。

私の代でアイヌ文化を無くすわけにはいかないという強い思いで活動に参加した白沢ナベや小田イトの世代。アイヌ文化を知りたい、残し伝えたいという思いが強かった中本ムツ子や上野清子の世代。さらにアイヌ語などを学び、自らの文化として理解を深め、アイヌ語劇や絵本などによる新たな発信を試みた高坂京子や小田智子らがいる。そして今日の組織的な活動を担ってきた中村吉雄や石辺勝行、野本夫妻らは千歳固有の文化の復元と次世代への確実な継承に努め、アイヌ文化への理解を深める活動に果敢に取り組んできた。現在は20歳代の若者や子どもたちも活動に加わり、新たな世代への伝承が始まっている。

参考文献

アイヌ文化振興・研究推進機構『アイヌ生活文化再現マニュアル 踊りウポポ・ホリツパ・リムセ』2015年、HP／長見義三『千歳地名散歩』北海道新聞社1975年／先田次雄「なぜ今、『支笏湖歴史年表』か」『志古津』第21号2015年／佐藤孝雄「熊送りの源流」『新北海道の古代』3北海道新聞社

2004年／田口尚「アイヌ文化の木製品」『新北海道の古代』3 2004年北海道新聞社／北海道アイヌ協会千歳支部『千歳市に伝わるアイヌの伝統料理』2006年／千歳アイヌ協会パンフレット／千歳市教育委員会『千歳市美笛における埋蔵文化財分布調査』1984年／千歳文化財保護協会「熊送り場に於けるイノシタク」『ちとせぶんか』6号1983年／中川裕『アイヌ語千歳方言辞典』1995年草風社、『アイヌの物語世界』1997年平凡社／北海道環境生活部アイヌ政策推進室HP／北海道文化財保護協会HP

第2項 市民とアイヌ文化

市民が演じた野外劇「いのち宿る水」

平成2（1990）年2月に創作野外劇の話が持ち上がった。千歳川をはじめとする豊かな千歳の自然を生かし、市民による手づくりの野外劇を公演することによって街の文化を高めようとの市民の声だった。

同年4月2日に市内の演劇愛好家らが集まり発起人会を開催し、千歳「自然劇場」実行委員会（自然劇場）が結成された。委員長は渡部茂であった。4月からさっそく千歳高校教諭の平田智啓を中心に準備に取りかかり、参加者やスタッフを募集。脚本は平田の同僚であった小佐野整が担当した。千歳の豊かな自然の大切さをテーマに掲げ、アイヌ民族の自然観を基本に脚色した。

物語は子供たちが過去のコタンにタイムスリップし、自然と共に生きていくアイヌの暮らしに触れながら豊かな自然や生命の大切さに気付いていくという内容である。当初の予算額は330万円であった。

折しも市では平成2年度から「まちづくりは人づくり」をモットーに進めるふるさと創生事業の一つとして、市民の社会教育事業を支援する「鶴せんねんじゅくは千歳塾」を事業化した。自然劇場はさっそく野外劇の事業申請を行い5



写真15-6 フチたちの指導でホリッパの練習

月25日付けで鶴は千歳塾の事業として採択され、交付金額は230万円に決定した。加えて北海道の北の生活文化振興事業にも採択され50万円が交付された。

出演者は6月から演技に必要な心構えや発声法、呼吸法などの基本を身に着けるため札幌放送劇団に所属するプロの俳優であり演技指導者の関口正幸らに教えを乞うなどして演技力の向上に努めた。7月には後援するウタリ協会千歳支部がアイヌ文化の自然観の解説やフチたちの指導による古式舞踊の練習を行うなど全面的に協力した。

本番は8月25日の午後6時30分に開演した。場所は桂木2丁目の千歳川河川敷の仮設舞台である。出演者は小学5年生をはじめ中高生から中高年の成人までのおよそ80人。アイヌ文化伝承者の白沢ナベフチも参加しユカラを語った。かがり火がたかれ幻想的な舞台は2時間におよび、最後に喜びを表すアイヌの古式舞踊のホリッパを皆で踊り野外劇の幕が閉じた。

事業実績書によると野外劇に訪れた市民は約2200人という。市民団体とウタリ協会千歳支部が全面協力して取り組んだ千歳初の大きな事業になった。アイヌ文化の観点からは市民が千歳にアイヌ文化が存在することを認識し、理解を深めたことが大きな成果であった。

チセのある小学校

千歳には全国で初めて小学校の教室に復元されたアイヌのチセがある。チセとはアイヌ語で家を示す言葉。

主に木とヨシで作られたアイヌの住まいである。ヨシは茎が空洞で空気をたくさんため込んでいるため、幾重にも重ねることにより高い断熱効果を得ることができる。またチセの内壁や床に敷かれるゴザはシキナと呼ばれるガマの葉で編まれている。ガマの葉はスポンジ状の構造でヨシ同様にたくさんの空気を含んでいる。一見頼りなく見えるチセは断熱効果の高い素材を巧みに利用した寒冷地に適した住宅であった。(詳細は『新市史(上)』P265参照)

チセのある学校は富丘2丁目に位置する末広小学校である。昭和31(1956)年4月1日に末広町に新設したが航空機騒音のため49年4月1日より現在地に移転した。なぜ末広小学校にチセが作られたのか、「チセ」のある学校』によるといきさつの概要は次のとおりである。

設置に至る経緯 平成5(1993)年10月28日に開催される学芸発表会について2年生を担当していた佐々木博司、田中美穂両教諭は演目を「世界の歌と踊り」に決め、その中にアイヌ民族の歌と踊りも取り入れることにした。相談したのが同校に通学する子どもがいて保護者でもあった野本久栄、敏江夫妻だった。当初は差別を危惧していたが、両教諭の熱意に協力を承諾した。佐々木らは自らが千歳のアイヌ文化を知ることが先決ということで、アイヌ語教室などに参加し、フチたちと交流を深め実際に歌や踊りを体験した。学芸発表会の演目はウポポとホリッパに決まり、野本夫妻の指導とともにアイヌ語教室や千歳アイヌ文化伝承保存会、北海道ウタリ協会千歳支部の支援を受けて練習を行った。本番では子供たちは戸惑うことなく楽しく演じることができた。発表会後の反響は大きく、佐々木によると地域の人々や保護者が持っていた「アイヌ文化は知らない、見たことがない」などの垣根が取り払われたように感じたという。

佐々木らはその後も野本夫妻や千歳アイヌ文化伝承保存会などの協力を

得て子供たちのアイヌ文化を学習する機会を設けていく。その中で、これまで学習で使ったアイヌ民具を展示し、全校生徒の学習に活用したいとの思いが強くなる。余裕（空き）教室を利用し明治期のアイヌや和人の家などを展示する「地域文化資料室」を思い立つ。このアイディアに教頭や校長は理解を示し、具体的な事業計画を作ってみることになった。佐々木らは設計に取り掛かるが所詮門外漢である。そこで北海道ウタリ協会白老支部（当時）の岡田路明（現・苫小牧駒澤大学教授）の教えを乞い、全面的な協力を得ながら具体的な地域文化資料室を描いたが、資金の目処はたっていないかった。

資金の調達 僅かな光明が見えたのは7年の春。市教育委員会に市民の社会教育事業を支援する「鶴は千歳塾」という補助制度があった。さっそく担当課に相談するが、小学校は学校教育の領域であり制度上社会教育予算を手当てすることは困難とのこと。何とかならないかとの熱心な要望に、学校の事業ではなく地域住人が社会教育の教材として地域文化資料室を計画するというならば補助対象の可能性があると示唆があった。さっそく地域住民の協力を得て地域文化資料室設置実行委員会が組織され、多難な事務調整を経て補助申請の手続きがなされた。補助額は30万円だった。同年、北海道の「生涯学習振興奨励事業に係る補助金」を申請し30万円が交付され、資材や民具の調達に目処がついた。

確保した予算の多くはチセの建築資材や漆器などの民具などの購入に充てられ、チセを設置する作業は全て有志のボランティアで行われた。

様々な支援とチセの設置 当初の計画にあった和人の家は資金が厳しいため取りやめチセだけをつくることになった。しかしチセの建材は製材したものではなく自然木であり、その入手は困難を極めた。これを一挙に解決したのが校区にあった千歳市森林組合の組合長理事鈴木昭廣の協力だっ

た。紹介したのは実行委員会委員長でPTA会長の藤田勝久である。

鈴木は所有する森林からトドマツやナラ、アオダモなどを柱や屋根材、壁材として提供した。いよいよチセを建てることになるが素人では安全面などに大きな不安があった。ここに新たな助っ人が登場する。子供が末広小卒業生の建築会社を経営する萩生田由一である。建築のプロとして安全面に配慮した建築作業を無償で一手に引き受けた。チセの柱の配置や壁、屋根の構造などは『チセ・ア・カラ』などの文献を調べたほか、チセづくりの経験がある前出の岡田の教示を仰いだ。

資材集めで苦労したのが屋根や壁になるヨシであった。千歳には戦前まで長都沼という大群生地があったが、沼は農地に変わっていた。市内のガマの生息状況に詳しい谷上隆からの情報を得ながら八方手を尽くしたが必要量を確保できず、不足分は市販の葭^{よし}簀^すを使うことになった。ヨシを屋根に葺いたのは造園業を営みヨシの扱いに慣れた山田文雄であった。山田の全面的な指導のもと数名が取り組んだ。山田のその後のメンテナン^{メンテナン}スも善意で行っている。野本はチセに必要な臼や杵、イナウやイナウキケなどの製作とともに炉棚や炉鉤、炉材の調達を行った。床に敷くゴザは末広小の教職員や保護者、千歳アイヌ文化伝承保存会の小田智子らの会員、多くの部外者であった金子美保など、多くの善意と絆に助けられ10枚ほどが作製



写真15-7 教室に設けられたチセ



写真15-8 チセの中でアイヌ文化を学ぶ (提供:末広小)

された。そして8年3月23日、紆余曲折を経て念願のチセが完成した。

アイヌ文化学習 末広小学校では平成2年から6年間継続したアイヌ文化学習の教材を集大成したものと、8年からアイヌ文化学習が全学年の一貫したカリキュラムに位置づけられた。1年生が卒業するまでの6年間でアイヌ文化学習は100時間に及ぶ。その中心にあるのが全国で初めて小学校の教室につくられたチセである。学校という環境にチセを中心とする本物のアイヌ文化を持ち込んで学習する試みは、アイヌ文化を体験できるといふ大きな教育的効果を生み出した。子どもたちはアイヌの遊びや唄、踊り、料理、楽器や生活道具に触れたり作ったりなどの体験を学年別に積み重ね、多様なアイヌ文化や歴史について学んでいる。児童ばかりではなく地域も「末広小のアイヌ文化学習を支援する会」を結成し支援している。もちろん千歳アイヌ協会や千歳アイヌ文化伝承保存会は講師の派遣などを全面的に協力し大きな支えになっている。

佐々木らが立ち上げた地域が学習を支える仕組みはしっかりと末広小に根を下ろし、チセを中心に20数年の間、様々な発展し継承されてきた。このような教育活動は全国的にも高く評価されている。また、19年11月にチセを見学した北海道ウタリ協会(当時)加藤忠理事長は「ここではおいを感じ触ってみることができ。最先端を行く素晴らしい教育だ」と評したという。

参考文献

佐々木博司・田中美穂『「チセ」のある学校』クルーズ2011年／末広小のアイヌ文化学習を支援する会『さあアイヌ文化を学ぼう!』明石書店2009年／『千歳民報』